

阿部亮子著

『いかにアメリカ海兵隊は、最強
となったのか』——「軍の頭脳」の
誕生とその改革者たち——を読んで

安全保障委員会事務局長

中川 義章 陸自78

本書は、女性政治学者の手になる米
国海兵隊の軍事ドクトリン研究書で
す。堂々たるハードカバー全324頁
の軍事研究専門書の大作です。著者の
博士論文「米国海兵隊の電撃戦の起源
——機動戦構想の思想的背景と採用、制
度化」を加筆・修正したものです。政
治学のなかの政治史で歴史学の一部と
いうことになります。

当たり前の話ですが、米国のみなら
ず諸外国では、米國政治を研究する上
で、その安全保障分野の当事者の一つ
である米國海兵隊の歴史研究は学問に
なります。著者も「研究対象と研究方
法を共有している人々」は、確かにい
るけれども、日本人ではないと述べ
ています。博士論文で軍事ドクトリン
を扱うという無謀な試みは、甚だしい
孤独感を抱えながらの研究だったよう
です。それでも、同志社大学を始めと
して、日本の奨学団体が支援する形で、
著者は英国バーミンガム大学大学院、
米國海兵隊大学図書館に留学し、在外
研究を続けて、本書をまとめるに至っ

ています。少なくとも、軍事研究を忌避する日本学術会議の流れとは違う動きが、国内にあるということを証明する生き証人です。

研究対象の米国海兵隊は、おそらく初めての日本人研究者の「海兵隊のドクトリンの改革を研究したい」という要望を聞いて大いに驚いたでしょう。しかし、すぐに米国海兵隊の真の姿を同盟国日本に伝える良い機会だと気が付いたようで、大変歓迎したのでした。奨学金で渡米した著者を、クワンテイクの海兵隊大学図書館に客員学生として本人用のオフィスを準備して受け入れたのです。生まれつきの素晴らしい行動力に恵まれた著者は、その機会を最大限に活用して、ベトナム戦争後の米国海兵隊のドクトリン研究と組織の改編を焦点とする研究を推し進めたのです。

本書が明らかにする海兵隊ドクトリン改革の焦点は、ベトナム戦争後の動きについてです。その中心人物であった第29代海兵隊総司令官グレイ大将とその幕僚や関係者に直接インタビューした成果や海兵隊大学図書館の膨大な第一次資料を読み込んだ成果がまとめられた労作です。注と参考文献が充実しており、これからこの分野を研究する研究者にとって、大変参考になるものです。

本書は、政治学者のまとめた軍事専門書ですので、政治学者用の概念説明などが含まれています。これが軍事の専門家ではない人々に、最新の軍事常識の手ほどきをする内容として大変充実している特長があります。

まず、構成は、「はじめに」、序章、第1章から第6章、終章の8章構成です。「はじめに」という前書き部分で、なぜ海兵隊を扱うのかを論じています。米国陸軍よりも先行研究が少なく、さらに知的な雰囲気を感じられない海兵隊が、如何に変化したのかに学者としての興味が生じたようです。序章は、軍事ドクトリンとは何か、そしてなぜ研究に値するのかを論じています。

第1章は、2000年代初頭の海兵隊のいくつかの作戦構想を紹介しています。第2章は、海兵隊のドクトリンと実戦の歴史を振り返っています。第3章は、1980年代後半から90年代初頭に採用された機動戦ドクトリンの思想的特徴とその背景が説明されています。第4章は、機動戦構想の採用に当たり、ベトナム戦争後の戦略環境の変化とグレイ大将のリーダーシップのどちらが、主導したかという分析を行います。第5章と第6章では、グレイ大将による「頭脳力」の改革過程を検討し、機動戦構想がどのように海兵隊

において制度化されたのかを描いています。特に、MCCDC（海兵隊戦闘開発本部）の新設と将校教育課程の見直しの持つ重大な意義を指摘しています。終章は、全体の結論です。

本書は、第一次資料と当事者へのインタビューによる現場主義、実証主義に基づく検証によって、戦略環境の変化に対応するのではなく、「実戦で勝利する軍隊」を追求した米国海兵隊の「改革者」たちが行った「機動戦」、ドクトリンの採用と組織の改革があったことを明らかにしています。そして、そのことがイラク戦争におけるバグダッドへの突進の成功につながったことや、「機動戦構想」の適用としてファルージャの戦闘においても、政治的・戦略的要請に応じて指揮官たちが柔軟に戦い方を変えられたこと等、実戦での勝利に貢献したことを主張しています。

一方で、それらの成果にも関わらず、米国がイラク戦争の終結に手古摺る現状は、「機動戦構想の限界」を示しているとしています。この限界が、構想そのものの問題なのか、構想の使用方法の問題なのか、イラク戦争の性質に由来するものなのか、戦略的な失敗を米国が犯しているからなのかについては、今後の研究の課題としています。かなり堅い重いテーマを扱っているのですが、本書の魅力の一つは、21世紀

初頭の米国海兵隊を中心とする米国軍の現場主義によるルポルタージュであることです。トランプ政権の主要な軍人出身スタッフとして、海兵隊大将がいたことは記憶にあると思います。ケリー大統領首席補佐官、マティス国防長官です。この二人の、海兵隊での活躍ぶりやグレイ大将との因縁もさらりと描かれています。海兵隊と対比する形で、先行した米陸軍のドクトリン開発についても十分な説明があります。

著者によれば、小学生の時にベトナムでおぼろげに抱いた問い「なぜ戦場の会戦では必ずしも敗北しなかったように思われるアメリカが、戦争に敗北したのか」が研究の出発点であるとのこと。今後の研究の課題などを見ると、本書は気鋭の若い政治学者による本格的な軍事研究の「始まりの始まり」のようです。まだまだ、研究は広がりを見せるようで楽しみであるとともに、後輩の軍事専門家による本格的な研究成果発表を期待するのは、老人のひとりよがりなのかとも思う次第です。文書管理の厳格化の流れで、『陸戦研究』も既になく現役諸官の自由な討論・意見発表を聞くことも少なくなり、はなはだ心配かつ残念な状況です。会員の皆様には、米国海兵隊と日本の学界の新時代を感じる一冊として、推薦申し上げます。